第94回日本精神神経学会

セ ミ ナ ー

# 青年期・成人期自閉症の発達精神病理と治療

小 林 隆 児

精 神 神 経 学 雑 誌 第 101 巻 第 1 号 別 刷

平 成 11 年 1 月 25 日 発 行

PSYCHIATRIA ET NEUROLOGIA JAPONICA

Annus 101, Numerus 1, 1999

セミナー

# 青年期・成人期自閉症の発達精神病理と治療

〔発表要旨〕

小林　隆児（東海大学健康科学部社会福祉学科）

## はじめに

この50年間のわが国での自閉症研究の歴史の中で自閉症の子どもたちがどのような成長を遂げてきたか次第に明らかになり，現在ではその知見をもとにこれまでの自閉症治療について再検討の時期に入っている．ここでは主に筆者の最近の自閉症に関する発達精神病理学的研究[9]を中心にして青年期・成人期自閉症の問題を論じ，今後の自閉症治療の方向性について私見を述べてみたい．

## 自閉症追跡調査結果の時代的変遷

自閉症と診断された子どもたちは成長してどのような状態を呈するようになるのであろうか．世界で行われてきた自閉症追跡調査結果から眺めてみると，彼らの長期的予後は極めて悲観的であった．自閉症の全般的転帰は，一部の例外を除いて総じて70～80％が不良とみなされてきた．わが国での自閉症研究の歴史は50年あまり経過しているが，50～60年代のいわゆる第一世代の自閉症の予後[24]は良好群が10％台で外国の研究結果と同じ傾向を示していた．しかし，その後70～80年代の第二世代[13]になると，良好群は20％台と上昇し，自閉症治療教育が次第に普及していくにつれ，自閉症の長期予後も改善していくことが間接的ではあるが示唆されてきた．90年代の現在では，早期診断，早期治療が少しずつ現実化し，治療教育も相対的には充実の方向に向かっていることから，自閉症の病像は軽症化しつつあるといえよう．しかしその一方で強度行動障害といわれる激しい行動障害を呈する自閉症の存在が注目されるなど，重症化の兆しも危惧されている．

## 青年期・成人期に認められる多彩な病態

では具体的に青年期・成人期になると自閉症にどのような病態が認められるようになるのであろうか．これまで報告されてきた内容を整理すると次のようになる．分裂病様状態（幻覚妄想状態），感情障害（周期性感情障害），心身症，摂食障害，強迫症状などの他に，強度行動障害（激しい自傷・他害など），さらには高機能自閉症に自明性の獲得の障害といえる重篤な自我障害を呈することもある．

## 長期経過で持続しやすい病態

自閉症は三つの症候，すなわち，①対人関係の質的障害，②言語性・非言語性コミュニケーションの質的障害，③強迫的行動様式（行動や興味の明らかな制約）の特徴をもつ．つい最近まで自閉症の言語認知障害が多くの研究者において支持され，言語認知面の発達の問題に研究の焦点が当てられてきたが，Piven[18]は，高機能自閉症の長期経過においてコミュニケーション能力と社会的行動は比較的改善していくが，常同反復的・儀式的行動，すなわち強迫性は改善が困難であると指摘した．この研究は回顧的方法であるが，Kobayashi et al[12]は1990年の追跡調査対象について前方視的方法によって成人期の行動特徴を調査した結果，知的水準の高低にかかわらず，強迫的行動特徴が非常に高率で残存していることを報告した．これらの結果はそれまでの言語認知障害像への関

心の偏りに対して強迫性の成り立ちについてもっと注目する必要性を示している．先に述べた青年期・成人期自閉症に認められる種々の病態を見渡してみると，その病態に共通する特徴として，行動と意識の乖離を指摘できるように思う．

## 自閉性をコミュニケーション発達の問題として考える

自閉症の言語認知障害像の特徴は，対人交流を通して初めて獲得できる能力に最大の欠陥がある[5]．そこで筆者は自閉症の中核的病理である自閉性を社会性の障害，すなわちコミュニケーション発達の問題として捉える必要がある．コミュニケーションは当事者双方の問題であることを考えると，コミュニケーションが成立するか否かを決定する要因は決して子どもの側の問題としてのみ考えることはできない．子どもの側の要因が大きい場合もあれば，養育者側の要因が大きい場合もあるし，双方の要因がともに大きく関与している場合もある．そこで筆者は自閉症を関係性の障害 relationship disturbances[23] として治療介入を試みる必要性を主張している．自閉症の言語認知障害仮説は Piaget の認知発達モデルを基本にして考えられているが，関係性の障害として捉える際の発達モデルとして交互作用発達モデル (Sameroff)[8] が参考になる．ここでは個体因（資質型 genotype）と，環境因（環境型 environtype）との力動的な相互作用によって独特な障害像（表現型 phenotype）が形成されていくと考えられている．個体因そのものも交互作用によってどんどん変容し発達していくととらえられ，環境因の働きが個体因の資質そのものと同等に大きな作用を及ぼすものとみなされている．

## コミュニケーションの二重構造

ここでコミュニケーションの構造を考えてみよう．コミュニケーションは一般的に考えられているような情報の授受という双方向性をもったコミュニケーション（象徴的コミュニケーション）の他に当事者双方の間で気持ちが通じ合うといった情動水準のコミュニケーション（情動的コミュニケーション）があることは余り認識されていない．この種のコミュニケーションは，象徴的コミュニケーションとは本質的に大きな違いを持ち，同時的な性質を有し，二つの音叉が共振する現象によく例えられている．コミュニケーションはこのような二重構造を有していることが，自閉症にみられるコミュニケーションの病理構造を考える上で重要な意味を持っている．

## 自閉症では情動的コミュニケーションは成立しないか

自閉症の概念提唱者である Kanner[2] は最初の論文で情緒的接触の自閉性障害と明記したように，自閉症の中核的問題を情緒的接触の障害とみなしていた．今日 Kanner の主張を再評価しようとする機運が生まれつつあるが，その代表的な研究者である Hobson[1] は Kanner 同様，自閉症は先天的に情緒的交流の能力の障害を持っていると考えている．両者とも自閉症は情緒的すなわち情動的コミュニケーションは成立しないことを自閉症の中核的問題とみなしている．実は情動的コミュニケーションの成立には，愛着関係 attachment の成立が不可欠であるが，今日自閉症にも愛着行動が認められることは多くの研究者によって支持されている[20,21]．

## 自閉症の独特な知覚様態

筆者は自閉症の知覚様態の特徴に着目しこれまでいくつかの報告をしてきた．自閉症の知覚様態は，相貌的知覚[25] や力動感 vitality affect[24] といった無様式知覚といわれている原初的知覚様態が加齢を経ても根強く持続し活発に働いているという特徴を持っている[3,6,7,10]．通常のわれわれの知覚様態は各様式に分化して機能しているが，自閉症の知覚様態はそうした知覚機能の分化が容易には進展していかない．ただこのような無様式知覚は乳幼児期早期において活発に働き，環境世界を把握している．無様式知覚の特徴は主体と対象が運動―情動的反応によって媒介され，強く一体

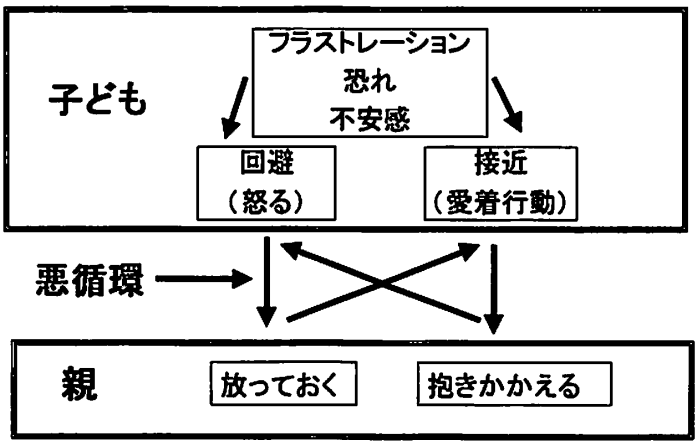


図1　接近・回避動因的葛藤の悪循環（Richer, 1993）

化されて，主体と環境とが融合されたような状態と見なすことができる．主体の生体内部の生理的変化や情動面の変化によって，環境世界は容易に変容していく．健康な乳幼児であれば，快的情動によって環境世界は快的色彩を帯びることが圧倒的に多いが，不快ないしは不安の強い情動に支配されやすい自閉症においては，逆に環境世界は迫害的な色彩を帯びやすくなる．臨床場面でそのような場面によく遭遇してきた筆者はこれらの現象を知覚変容現象として概念化した[4,11]．

### 情動的コミュニケーションを阻む要因

養育者と自閉症の子どもとのコミュニケーション特徴をつぶさに観察してみると，子どもは養育者に愛着行動を示すことは頻繁に認められるのであるが，容易には両者の間で関係は深まらない．接近行動を示す以上に，養育者に対する回避行動が頻繁にみられる．このような行動特徴をRicher[19]は行動学的視点から接近・回避動因的葛藤（図1）として捉えている．

筆者ら[14,15]は彼らの接近・回避動因的葛藤の要因を検討してみると，個体側要因（強い敏感性，気質，遺伝など）のみならず，環境側（養育者側）要因が深く関与していると考えられる症例があることが次第に明らかになってきた．コミュニケーションの成立のためには当事者双方を考慮しなくてはいけないことを考えると，このことはきわめて当然のことなのであるが，実際のコミュニケーションの成立過程で養育者側の要因がどのように関与しているのかをわれわれは関係性障害への治療介入の蓄積の中から明らかにしていく必要があると考えている．その中で確認されたことは，養育者自身の過去の自分の親との間での愛着関係を巡る問題が接近・回避動因的葛藤に関与していることであった．このような問題が存在しない症例では，holdingを養育者にしっかりとできるように指導したり，具体的な子どもへの接近方法を助言すると比較的容易に接近・回避動因的葛藤は緩和し，情動的コミュニケーションは急速に深まっていくのであるが，養育者側に愛着を巡る葛藤が存在する症例では，母親・乳幼児精神療法を通して養育者の成人愛着表象を取り上げていくことが必要になる．ここで養育者が治療者との間で過去の体験を一貫性をもって語ることができるようになると，母子間でも子どもは急速に母親に愛着行動をとるようになる（図2）[15]．

### 養育者の内的表象と情動的コミュニケーション

養育者が自分の子どもに抱く表象には，次の三つの層がある[17]．すなわち現実的乳児像，空想的乳児像，幻想的乳児像の三つの層が存在する．現実の母子関係の中でそれら三つの乳児像が複雑に錯綜し合いながら現出することが分かってきた．

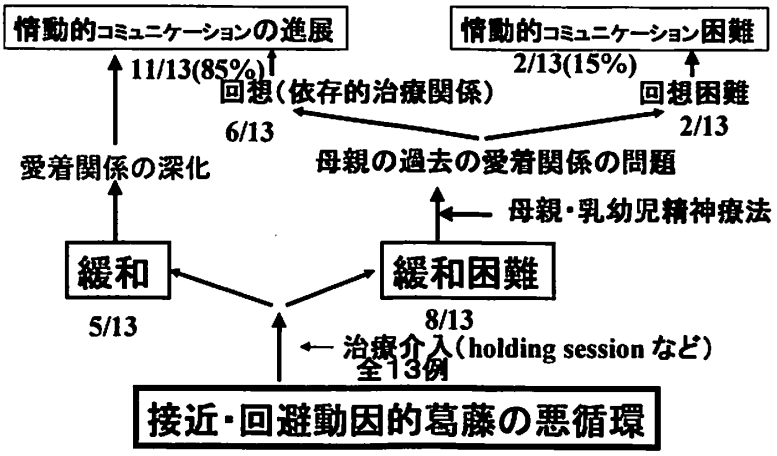


図2　接近・回避動因的葛藤と情動的コミュニケーション

自分の乳児を現実に相手している時に，心の意識の層では母親は目の前の乳児を見ているのではあるが，前意識の層ではその心には小さい時から空想してきた乳児像を投影しているとともに，無意識の層では赤ん坊だった時の無意識記憶が呼び覚まされてそれが眼前の乳児に投影される．もし無意識の層での自らの乳幼児期の体験が何らかの苦悩を伴ったものであれば，それが様々な形で現実の母子関係に反映されるわけである．ここで最も臨床上問題となるのは，幻想的乳児像といわれるものへのとらわれである．ここには養育者の過去の愛着体験が如実に反映することが次第に分かってきた．親の精神病理の世代間伝達の問題である．

なぜ養育者の心の中に表象される子ども像の質がここで問題とされるかといえば，乳児は自分の存在を養育者の心の中に養育者とともにいる自己として発見するからである．このようなことを可能にしているのが，養育者と乳児との間で生後数ヵ月後に成立する第一次間主観性の成立である．このような関係性の中では先に説明したような，両者の情動が共振し合いながら両者間で共有されていく．無様式知覚の世界ではこうした関係性が容易に可能になっていくのである．もし養育者の心の世界に幻想的乳児像が大きく占有して現実的乳児像が排除されてしまうならば，乳児は養育者の心の中に現在の自分の姿を見いだすことができないのである．両者間で情動の共有も極めて困難な状況になるのである．

### 情動的体験と言語による翻訳

乳児はまず環境世界を情動によって体制化するとされている．その後に主に養育者の関与の中でその体験が言語によって翻訳されていく．この過程は私だけの世界からみんなと同じ世界へと飛び立っていくプロセスともいえよう．したがって乳児と養育者の間で情動的コミュニケーションが深化した関係性が成立していなければ乳児の体験と養育者のそれとの間でずれが生じてしまうことは容易に想像できる．

### 情動的コミュニケーションと強迫性

したがって情動的コミュニケーションの進展過程において重要なことは，養育者が子どもの意図に沿った働きかけをすることで行動と意識との乖離をなくすこと，そのような関係性の中で養育者（治療者）が体験の持つ意味（文化，共通認識）を暗黙のうちに伝えていくことが重要になる．筆者は情動的コミュニケーションの進展過程での子どもの行動と養育者から付与されていく意識（言葉による働きかけを中心として）との間で先に述べたような乖離が生じ，それが肥大化し子どもの側に次第に蓄積し表象化していく過程にこそ自閉症に終生持続しやすい強迫性の成り立ちと深い関連性があると推測している．われわれはこの数年

間東海大学健康科学部の Mother-Infant Unit[16] で先に述べた理論的根拠に基づく臨床実践を蓄積してきたが，その中で治療介入によって自閉症圏障害の大半の症例において強迫性が次第に消退していく事実を確認することができた．今後はその蓄積の上で彼らのコミュニケーション発達の過程がいかにして象徴的コミュニケーションへと進展していくかを治療的関与の中で検討していくことが切実に求められているのである．

## おわりに

青年期・成人期自閉症に関する精神病理学的知見を発達的観点から捉え直し，それをもとに自閉症の早期治療の可能性を論じてきた．自閉症にみられる精神病理の中でも強迫性について今後もっと注目する必要があることを特に筆者は強調した．

今回講演の機会を与えていただきました第94回日本精神神経学会総会小椋力会長，座長の労をとっていただいた恩師村田豊久先生（九州大学教育学部），ならびに関係者の方々に厚くお礼申し上げます．

これまでに実施してきた本研究に対して，厚生省精神・神経疾患研究委託費（栗田班）（1993～1995）（1996～1998），文部省科学研究費補助金基盤研究（課題番号08671110），文部省科学研究費補助金重点領域研究「心の発達」（課題番号09207221），安田生命社会事業団（1996），メンタルヘルス岡本記念財団（1996），富士記念財団（1996～1997），三菱財団（1997～1998）の研究助成を受けた．

本研究にこれまで参画していただいた共同研究者，白石雅一（仙台白百合女子大学人間学部），石垣ちぐさ・中澄襟子（丹沢病院精神科），竹之下由香（聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院神経精神科），財部盛久（琉球大学教育学部），林田治美・安枝三哲（東海大学医学部医学研究科）各氏，ならびに社会福祉法人嬉泉袖ヶ浦のびろ学園および袖ヶ浦ひかりの学園，社会福祉法人ふじの郷さつき学園の職員の方々にも多大なご協力をいただきました．厚くお礼申し上げます．

## 文　献

1) Hobson, R. P.: Beyond cognition: A theory of autism. Autism: Nature, diagnosis and treatment (ed. by G. Dawson), Guilford, New York, p. 22-48, 1989

2) Kanner, L.: Autistic disturbances of affective contact. Nervous Child, 2: 217-250, 1943

3) 小林隆児：自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理．精神科治療学，8；305-313, 1993

4) 小林隆児：自閉症における「知覚変容現象」の現象学的研究．精神医学，35；804-811, 1993

5) 小林隆児：精神遅滞と自閉症――自閉症の認知障害に関する再検討――．神経精神薬理，15；773-779, 1993

6) 小林隆児：自閉症にみられる相貌的知覚と妄想知覚――情動的コミュニケーションの成り立ちとその意義――．精神医学，36；829-836, 1994

7) Kobayashi, R.: Physiognomic perception in autism. J. Autism Dev. Disord., 26, 661-667, 1996

8) 小林隆児：自閉症――交互作用発達モデル．こころの臨床ア・ラ・カルト（印刷中）

9) 小林隆児：自閉症の発達精神病理と治療．東京，岩崎学術出版社（印刷中）

10) Kobayashi, R.: Physiognomic perception, vitality affect and delusional perception in autism. (in submission)

11) Kobayashi, R.: Perception metamorphosis phenomenon in autism. (in submission)

12) Kobayashi, R. & Murata, T.: Behavioral characteristics of 187 young adults with autism. Psychiatry Clinical Neurosciences, (in print).

13) Kobayashi R, Murata T, and Yoshinaga K: A follow-up study of 201 children with autism in Kyushu and Yamaguchi Areas, Japan. J. Autism Dev. Disord., 22; 395-411, 1992

14) 小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香：自閉症におけるコミュニケーションの進展過程に関する臨床的研究――情動的コミュニケーションの進展過程を中心に――．平成8年度（1996年度）安田生命社会事業団研究助成論文集，32；27-37, 1997

15) 小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香：乳幼児期の自閉症圏障害における情動的コミュニケーションと母親の内的表象．乳幼児医学・心理学研究，6；9-27, 1997

16) 小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香：東海大学健康科学部における Mother-Infant Unit の活動紹介．乳幼児医学・心理学研究，6；31-43, 1997

17) Lebovici, S.: Le nourrison, la mère et le psychanalyste: Les interactions précoces. Paris, Éditions du Centurion, 1983

18) Piven, J., Harper, J., Palmer, P. & Arndt, S.: Course of behavioral change in autism: A retrospective study of high-IQ adolescents and adults. J. Amer Acad Child Adolesc Psychiat., 35; 529-532, 1996

19) Richer, J. M.: Avoidance behavior, attachment

and motivational conflict. Early Child Development Care, 96 ; 7-18, 1993

20) Rogers, S., Ozonoff, S. & Maslin-Cole, C. : A comparative study of attachment behavior in young children with autism or other psychiatric disorders. J. Am. Acad. Child Adolesc. Psychiat., 30 ; 483-488, 1991

21) Sigman, M. and Ungerer, J. A. : Attachment behaviors in autistic children. J. Autism Dev. Disord., 14 ; 231-244, 1985

22) Sameroff, A. J. and Emde, R. N. (Eds.) : Relationship disturbances in early childhood : A developmental approach. New York, Basic Books, 1989

23) Stern, D. : The interpersonal world of the infant : A view from psychoanalysis and developmental psychology. New York, Basic Books, 1985

24) 若林慎一郎，水野真由美：幼児自閉症の予後についての研究．児精医誌，16 ; 177-196, 1975

25) Werner, H. : Comparative Psychology of Mental Development. New York, International University Press, 1948